

西南アジア研究

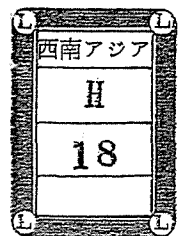
第 五 号

「アガデ(アッカード)のgur」について	中原 与茂九郎	1
いわゆるラガシュ文書の1, 2の問題点について	山 本 茂	3
バブ教とバハイ教	高 林 藤 樹	8
批評紹介		
A. ben SHEMESH: Yahyā ben Ādam's Kitāb al-Kharāj	佐 藤 圭四郎	14
A. PAGLIARO: Letteratura della Persia Preislamica	伊 藤 義 教	18
海外消息		29

京都大学
左京
市
海外消息

西南アジア研究会

1 9 6 0



grafie Nového Orientu,
Praha 1960.

Otakar Klíma : Über ein im
manichäischen Psalter er-
wähntes Buch von Mānī, in:
ArOr. 28/1960, S. 101-102.

Otakar Klíma : Etliche Be-
merkungen über Altheims
Geschichte der Hunnen I.,

in: ArOr. 28/1960, S. 295
- 307.

Otakar Klíma : Iranische
Miscellen II., in: ArOr.
28/1960, S. 457-466.

Jiří Bečka : New Papers on
Rūdakī by Tadzhik and Other
Soviet Scholars. in: ArOr.
28/1960, S. 494-501.

編 集 後 記

☆ 一年数ヶ月の空白を経て第5号がようやく誕生した。この間の待ち遠しかったことは形容出来ない程である。又、それだけにお待ち頂いた会員諸氏には先ずおわびを申しあげなければならない。

☆ 前号の編集後記を読むと、これまた遅延のおわびが述べられている。そしてその理由としてスタッフの外遊などによる不足を挙げている。ところが、この一年の間に事態はさらに喜ばしい悪転を見せた。若手編集陣の総留学により本誌の刊行はおろか、会務の執行さえ完全にストップしてしまった。そこで何はともあれ第5号を出さなければならないというので、伊藤義教・加藤一朗・吉田光邦の三氏を編集係にお願いし、庶務は高林が担当して発刊を急いだのであった。

☆ 1957年、本会が発足して以来常に着実な歩みを続けて来たと思うが、今や会の

基礎は全く固まった。今後、本会は多数の留学生の帰国を機に大躍進を遂げることと信ずる。又それは我々に課せられた使命でもある。本会は会の性格上、研究誌の刊行を最も主要な事業とするが、会の内容が次第に充実して来た今日、謄写印刷では何となく重みを欠く憾みもあり、国際的威信にもかゝるので、次号からは活版印刷に切り換え、堂々と学術誌界にデビューする予定である。従ってタイプによる「西南アジア研究」は本号で最後となる。さゝやかな発祥時代の本誌は、将来においても、こよなく懐しがられるであろうが、活版印刷に切り換えることは飛躍であり、目出度いことである。この切り換えに踏み切らせた本号の執筆者各位に厚く御礼を申しあげたい。

☆ 一年有余の空白中に新着図書もずい分あり、とても整理出来ない現状である。もちろん日夜その努力は続けられているが、本

号には時間の関係から掲載を断念した。図書目録は全部整理の上、正式に刊行される計画があるので御期待頂くようお願いする。

☆ 会費消息もニュースヴァリューがなくな

ってしまったが、宮崎副会長はフランス政府の招きで客員教授として赴任され、会員中にも藤本・内記・清水・勝藤・恵谷の諸氏が留学中である。 (高林)

1960年12月31日 発行

西南アジア研究 No. 5

発行者 西南アジア研究会(京都大学)

会長 足利惇氏

印刷所 中東文化印刷所